

Monthly Report 月間報告 2002年1月～6月

2002年1月

アフガニスタン復興支援 NGO 会議への NGO(民間活動団体)参加排除問題をめぐり外相の更迭までに至った件は、短波ラジオやインターネットを通じてこちらにも知らされる事実となり、NGO と政府の関係の持ち方の難しさについて考えさせられた月でした。同時にこちらエチオピアでも、プロジェクトの今後を巡り州政府の共同組合推進事務所と格闘の日々でした。

プロジェクトの撤退を来年に控え、諸々のプロジェクト活動を地域の村づくり委員会に託すことで、プロジェクトに継続性を持たせることが数年前から計画。委員会の組織強化と共に、郡、県、州レベルの共同組合推進事務所と話し合いを持ち続け、この地域の委員会が将来的に地域発展の担い手となる法人格を持った共同組合として活動していけることを目標としてきました。しかし、NGO によって進められた活動が住民によって継続されず、政府の認可を受けた組織も機能することなく、地域は活動 NGO の看板が立つだけの「墓場」と化している現実がエチオピアには多くあります。結局、これらの責任を負わされたくない州政府の共同組合推進事務所は NGO に懐疑的となり、FHI とも折り合いが合わず、当面プロジェクトは草の根レベルでの組織強化に焦点を当ててきています。

そして、2月初旬にはプロジェクト撤退に向けての具体的な話し合いの場を政府役人も含めて実施することになり、現場で直面している諸問題に触れてもらうきっかけとしてこの州政府共同組合推進事務所の出席を促す「働きかけ」が始まりました。

私：住民と直接対話ができるよい機会です。また、地域自立発展のために働いてきた我々 NGO が課題としていることを政府の方にも共に考えていただきたいのです。

州政府共同組合推進事務所の役人：でも、とりあえず災害予防対策委員会からの推薦状とかないの？あとあんた達の団体は政府の認可受けてる？あと年間予算はどれぐらい？(自分達の管轄下でありながら NGO がしていることを知らない…)

災害対策委員から役人を連れて再び：

私：このワークショップの諸費用は私達がもちますし、共同組合についての州政府の立場を是非農民の前でしっかりと伝えて、また彼らの意見にも耳を傾けてほしいのです。また、あなたたちにとっても多くを学べる機会です。

役人：まあ、それでは一人だけ専門員を派遣するよう手配しましょう。

(NGO がしていることを知ろうとしない…。)

1 週間後:

私: 来週のワークショップ参加者は?

役人: あちらのデスクにいる人が行きますから。でね、実は専門員を2日以上外へ出張出したくないんだよね。忙しくてね、うちは。

私: でも、ワークショップは全部で4日ということはすでにお伝えしておきましたが。しかも、最初から最後まで出ていただかないとあまり意味がないのですが。

役人: せめて最初の1日だけ出席するから、会場からうちの事務所(約100km)まで送り届けてくれるかな。

私: ……考えさせてください…。

といった調子で、最終的な決断権を持つ州政府がこの態度なので話しが進みません。これらの過程で気づかされたことは、私達 NGO は何のために仕事をしているのかという、根本にいつも立ち帰らなければならないということ。民間、ましてや政府に完全に無視された立場にある貧しい農民達の側にたっているのが原則であり、まさにそれが NGO の得意分野でもあります。しかし、気づかぬ間に農民達との間に大きな溝が出来ている現実があります。政府がやたらと NGO に口出しをするお国柄、役人と上手に渡り歩かなければこの国で仕事が出来ません。たとえ住民主体、参加型と建前をうったとしても。そして、いつのまにか役人と NGO 主導型の「地域住民参加」になってしまい、住民はただそれに乗せられるだけ。NGO 側も政府の意向に応じて規模拡大、これまた民間とは名ばかりの団体へ変貌、そして「官僚化」への一途をたどり始めます。

誰が必要、不必要という議論は無意味です。関係づくりが優先です。しかし、それぞれが成すべきことをそれぞれがしっかりと認識した上で行動しなければ、まさに社会に良い変化は訪れません。私達 NGO も地域住民から乖離した行政主導型の「システム」「ネットワーク」づくりばかりに集中しては、本来の目的から離れるばかり。ここは、まさに NGO ができることの限界を知りつつ、地域の中心である住民が自ら立ち上がられる後押し、勢いづけをするのに留めるべきだと思わされます。

官僚社会を極めているエチオピア。負けず劣らず日本もタテ割り社会。ひとりの政治家、官僚が言った・言わないを巡って議論している間にも、貴重な時間は過ぎていきます。人々はやる気をなくしていきます。諦めます。その一端を NGO が担わないように、私自身も気をつけたいと思います。

2002年2月

先月の報告でも触れたプロジェクト撤退に向けてのワークショップ開催と、それにまつわる役人達との戦い。4日間における話し合いも無事に終了し、すこしずつ今後の方向性が見えてこようとしている所です。しかし、住民組織の法人化の問題は依然残されたままです。共同組合として認定されるには、10年以上前の社会主義政権時に結成された名ばかりの共同組合を法的に解体し、そのほか様々な手続が山と必要であることも分かり、まさに私達に出来ることの限界を知る良いきっかけとなりました。また、エチオピア政府に蔓延る腐敗の温床には、国際 NGO もその一端を担っていることを改めて感じさせられました。

数年前ワークショップを開催した場所は法外に高くついたということから、今回は隣の郡の公民会館を会議場にし、近くの1泊約1ドルで宿泊できる安ホテルを利用することに私が決断。ワークショップ参加者は州、県、郡それぞれから災害予防対策事務所、農業局、水資源局、灌漑局、共同組合推進局、そして FHI のスタッフを含めて総勢 24 人。政府役人に対しては、交通費はもちろん、出張手当もすべてこちらが負担するのが慣わし。私達 NGO がこの国で仕事を始めるための許可を出した事務所の代表達ですから、今度は NGO が地域から撤退する際の関連政府それぞれの責任をはっきりさせる重要な機会です。ある程度の負担は考慮しなければなりません。

しかし、2日後数人の役人達が私をホテルの食堂に呼び出して言うのです。「会議場が汚いし、周りがうるさい。プロフェッショナルの話し合いには適切な場所ではない。しかも、ホテルは汚いし、ベットにはノミがいる。食事もまずい。少々胃腸の調子も悪くなってきた。薬も必要になるし、とりあえずもうすこし日当を増やしてくれ…。」

確かにすべてがいい環境ではありませんでしたが、電気も水も無い貧しい地域の自立開発について語り合う場所が、至れり尽くせりの豪華なホテル会議室である必要もありません。不衛生なホテル、ベットのノミ、脂っこくてとてもおいしいとはいえない地方都市のホテルの食事はエチオピアにおいて日常茶飯事。汚いトイレのためか数日便秘になるのが普通の私。日本で大きな犠牲を払って集められた支援を用いて、エチオピアの地域開発のために仕事をし、また私達がこのワークショップのすべての費用を負担しているのにもかかわらず、この反応が来た時には全身の力抜けていきました。断固としてこちらの立場を通すことも出来たのですが、大事な会議の途中で彼らが抜け出してもらっては困るし、何よりも今後長期的な政府との関係維持を考慮しても、最終的に要求をのまざるを得ませんでした。苦しい決断です。

この政府役人達の態度の背景には、資金潤沢な他の NGO による影響があります。彼らが高

級ホテルで開催するエイズ対策、貧困撲滅をテーマとしたワークショップの様子は、毎晩のニュースで放映される光景。正式な政府役人の主張手当ての数倍を払うのが大型国際 NGO の習慣となれば、私達に同じものを要求するの分からはありません。しかし、それは私達が出来るものとはかけ離れています。それでも、今回のワークショップによって、地域の役人が更に貧しい農民の痛みから遠ざかるきっかけを残念ながら作ってしまいました。さて、私が学ばされたこと、根本的な問題とは？

ひとつは私達の地域への取り組み方です。まずは、州、県、郡すべての行政府機関と連携して、農村の自立開発を進めようとする自体が現実的ではありません。しかし、プロジェクト開始時から「トップの州レベルも巻き込まないと」という概念が植えつけられているので、いつのまにかプログラム構成が「トップダウン」的になりつつあったことも気づかされました。あるスタッフには、「郡レベルの役人だけを首都の超高級ホテルに招いて会議を開いた方がよっぽどまし」と皮肉を込めて理解を促しました。

また、3年計画で95ページにも及ぶ提案書から始まり、毎年予算があてがわれ、プロジェクトの成果、長期的なインパクトまでを論理的に予測・枠組みを立てる(業界ではログフレームと言っていますが)、いわば先進諸国主導の「住民参加型」に偏っていることです。予算があるから消化しなければいけない、参加を促すために「参加してください」と押し付けることも本末転倒。本来ならこちらが論理的に考え準備した舞台に人々が参加するのではなく、人々自身がその舞台を作り上げるのです。予測不能な事態が多々ある地域開発の現場には、ある意味で私たちのようなひとつの NGO という組織の「文化・構造」なりを変えて行く態度が求められます。もちろん、パートナーはエチオピアの農民達ですから、変化も少しずつです。そして、結果も急いではいけません。

マイナス成長率を維持して久しく、先行きの見えない日本経済に、日本政府の構造改革はいち早く行動に移してもらいたいものです。一方、私達自身の構造改革も急がずとも着実に進めていく必要があります。それは、今私のすぐそばにいる農民達のためなのですから。

2002年3月

昨年末からプロジェクトの代理責任者としての役を務めるようになり、本当に自分が「エチオピアで飢餓に苦しむ人達のために何かしているのだろうか？」という悶々とした気持ちが募っています。官僚的な役人達との交渉事、あくまでも組織でしかすぎない NGO のしがらみ、あまり関わりたくない人事評価、期限内予算消化のための計画づくり。少しずつ地域の農民達から離れていく現実。自分が運転する車のバックミラーに、走り去った後の埃にまみれた農民達を見ると、心の中で申し訳ないと感じつつもブレーキが踏めない余裕の無さ。しかし、自分一人だけでは何も出来ない現実を知ると同時に、組織という枠組みのなかで必要とされる様々な責任を学ばせて頂いているのです。それはそれで大きな収穫です。

エチオピアに来てから早1年。本当にここまで支援を続けてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。そこで更にエンジン全開でプロジェクトのために！と行くところですが、今月は気持ちの上ですこし現場から距離を置きました。上記のようなジレンマの中で、「組織(プロジェクト)の中の私」ではなく、「私自身」がこのエチオピアで生きているのかを改めて振りかえってみたかったのです。

先月の月間報告でこんなことを書きました。「…地域開発の現場には、ある意味で私たちのようなひとつの NGO という組織の「文化・構造」なりを変えて行く態度が求められます。もちろん、パートナーはエチオピアの農民達ですから、変化も少しずつです。」この文章からは、まず自分達(組織)が変わることで、そこにいる人々により良い変化を促していこうという意図が汲み取れます。しかし、今私が疑問に思うのは、果たして NGO という組織が人々を変えていくことが出来るのかということです。組織は人の集まりであり、またお金の集まっているところでもあります。貧しい農民達を前にこの圧倒的な「政治力」を持つ組織・NGO は、農村地域で当然浮き上がります。外国人である私も同様です。この力関係の中で、農民達は組織という大きな船の中に身を委ね、「お上」の言うことが一番と捉えて疑わず、自分で考えることを止めてしまいます。それは私達が「参加型」と言い始める前からです。

私達が推進する土壌保全活動、住民組織結成運動など、それぞれはこの土地に適したプログラムであったとしても、「自分達で自分達の生活を変えられた、これからも自分達でやる！」と農民達に言わしめる最適な構造では決して無いと思います。組織が進める事に順応し、自分で責任を取るといった雰囲気が崩れていきます。純粋な社会運動が安易に政治活動に利用され、「自立した個がない」と言われて久しい日本社会の構造と性質が似ています。

もちろん、人の集まり・組織を通して活動する事が効率的ではあるのですが、そこに集い働く

ひとりひとは、組織に安住せず自分の判断が適切に出来る方向で人々と接していかなければなりません。このエチオピア農村部の人々との関係づくりも、「NGO と農民」ではなく、「私と農民」というより密な構図の中で地道に耕していかなければ、信頼を育めないばかりか結局「お上」の力に依存する腐った社会を作り上げる温床となります。スタッフ個人や私という名前ではなく、FHI という団体としてひと括りで農民に覚えられてしまっているのも、私にとっては大きな反省点です。

今月は、14年エチオピアに根ざして働いてきた野田スタッフが帰国されました。農民達が組織ではなく彼自身の存在と共に歩んできたところから、真に人々が自ら変わるきっかけができ、そして彼らによって続けられるものが生み出されてきました。「自分で考え行動する事」この大切な遺産をしっかりと引き継いでいきたいと思います。

数年後、私達が働くこのコミュニティーへ再びやってきた時に、こんな会話が出来なように願うばかりです。

私:「なぜこの活動をしているのですか？」

農民:「とても役に立つからです」

私:「なぜ役に立つのですか？」

農民:「以前ここにいた NGO がそう言ったから」

私:「なぜ NGO がそういったのですか？」

農民:「それは役に立つからです」

2002年4月

エチオピア北部。断崖絶壁の続く山々に囲まれ、大変厳しい環境の中で人々が生活しています。アヤレッチさんは年齢にしてすでに60歳は超えた女性。エチオピア人は年齢よりも老けて見えるので、実際には80歳ぐらいのおばあさんのよう。しかし、彼女はこの厳しい急斜面に住みながら、土壌保全の重要性を感じてひとりで石段づくりを始めました。そして、怠惰な夫と離婚し、子供のいない彼女は周りの住民と協力して急斜面を段々畑に変え、ついには見違えるほどの肥沃な土地に様変わり。

90年後半には地元政府、そして世界食糧機構からも、地域に与えた功績を評価されて表彰されたほどです。その彼女が言います。「私は何の教育も受けていない。土壌保全を政府から

指導されたわけでもない。でも、必要だと思ったから自分ひとりで黙々と働き始めたら、周りの村人もついて協力してくれた。そして、いつも雨で流されていた土もしっかり守られ、毎年食べるのに十分どころか市場に出荷して余りあるぐらいまで、穀物の生産が上がった。」平均寿命が40歳前後のエチオピアで、これだけ高齢でありながら力強い女性を見たことがあります。

同じ北部の街からすこし離れたところで、土壌が流出して草さえ生えなかった不毛の土地を、土壌保全で8年をかけて改善し、いまや地域で一番の収穫を得る農場へと変えたエチオピア正教会の神父を訪問。4人ほどの修道僧と共に始めた土壌保全。地域の農民は彼らを馬鹿扱いして相手にせず、協力者も得られなかったとの事。

しかし、8年経った今、周辺住民の土地は土壌流出で肥沃な土もなく、生産性は落ちるばかり。一方彼ら修道僧の土地は逆に黒々とした大地が続きます。ガブレ・キダネ神父は言います。「険しい山々に囲まれたエチオピアはアフリカの中でもとても厳しい生活環境。標高が高く生える木の種類も限られ、雨季には肥沃な土が急斜面に沿って流され、すべてナイル川に運ばれる。あのエジプトは遥々ナイル川によって流されてきたエチオピアの肥沃な土によって繁栄しているのです。水利問題でエジプトと揉めるのはナンセンス。その前にこの私達の土をこの国の中で食い止め、そして私達のために活かすのが私達の義務です」

依然慢性的な旱魃、飢餓に直面し、海外からの穀物援助でなんとか生き長らえているエチオピア北部の現状をも彼は憂えます。「見返りとして外国人から食べ物をもらえるので、地域の土壌保全をしているあの地域には夢も希望もありません。彼らと私達が住む環境に何の違いもありません。ただ自分で自分の土地を耕し、自分で食糧を生産する気があるのかどうかの違いだけです。」と、ここ数十年続く海外からの援助に依存しきったエチオピアの現状に警鐘を鳴らします。

今回メタロビの農民を引き連れて、以上の2ヵ所を訪問しました。メタロビはこの北部に比べれば問題の少ない場所です。しかし、私達がショックを受けたのはこの成功している人々の情熱です。プロジェクトでは毎回農民を対象にした土壌保全のセミナー、勉強会、道具の配布、スタッフによるフォローアップなど、すべてがお膳立てされているのに、目に見えた効果、コミュニティの反応はわずかです。もちろん、成果が現れるまでには時間が掛かる事は確かですが、一方で誰にも促されずとも自ら行動を起こした人々の姿には学ぶものがあります。

そして、以上の個所にはエチオピア中、そして世界中から人々がその成果を見にやってくるといいます。決して彼らは人に認められるために活動を始めたわけではありません。なにしろ、この正教会の土地は「聖なる土地」と修道僧達が捉えているので、どの訪問者も靴を脱いで入らなければなりません。裸足でごつごつした急斜面を上り下りするのに苦勞をしまし

たが、彼らの働きに感動しつつのまにか痛みなどは消えていました。裸足で歩かなければならない不便さを知っていても、人々はやって来るのです。この「人を動かす力」を見せつけられて、私自身も励まされました。たった 2 人の小さな働きですが、これまで様々なエチオピア社会の矛盾に疲れ切っていた私にとっては、大きな大きな励ましとなりました。メタロビも、こちらから宣伝せずとも、自然と周りから人々が引きつけられていく、人々に希望を与えるコミュニティーになれたらと心から願わずにいられません。

2002 年 5 月

首が動かないとはどれだけ不便であるかを思い知らされたこの 2 ヶ月。ちょっとした寝違いから極度な痛みを発展、2 週間ほどは起き上がるのにも苦勞するほどでしたが、一時帰国で精密検査、治療などを経てようやく痛みも治まりつつあります。重い頭を支えている首だけに、小さな痛みでさえもちょっとした動きができなくなります。

結局痛みを即取り去ることは難しいものの、日常生活で首周辺の筋肉をほぐすなどの自己管理をすることで、ある程度の痛みを抑え、また適切な予防が出来るという事がわかりました。対処療法的に表面的な痛みを短期間に無くすことを考えるよりも、その奥深い根本原因を突くために、痛みとずっと長く付き合っていく心構えでいくことが必要なのです。始めから「絶対にこの痛みを消さねばならない」と構えていたら、その痛みが無くなる前に疲れてしまって別の痛みを抱えてしまいそうです。どんな痛みも問題・悩みも生活の一部と捉えたら、何と気の楽なことか。

今年になってから、プロジェクトの問題点、官僚的な役人達に対してなんとか良い方向へいくための糸口を探りつつ行動に移すものの、どこか空回りしている所が多くありました。それは、とにかく目の前にある問題をいち早く解決するために、その原因を地道に探ることなく表面的な対処をしていた為に、再び同じような問題が勃発、その繰り返しだったのです。場合によっては、時間が経つこともひとつの解決方法だったなどとは思ってもよらないこともありました。「解決しなければならない」という焦りから、問題の根本に迫る「お付き合い」ができない余裕の無さが現れていました。

依然、貧困問題など様々な課題が鬱積するこのエチオピアにあっては、多くの援助団体が対処療法を繰り返し、それをし尽くして疲れ果てた感が否めません。問題の根が深いので、それこそ長い目で付き合う姿勢が無ければ、自分が追いこまれるだけです。ある意味、今回の首

の痛みも、積み重なる多くの問題に身動きの取れない自分への焦りから来ているような気がします。借金が多くてどうにもならないことを「首がまわらない」とは良く言ったものですが、多くのチャレンジに対して首が回らなくなる前に、地道に問題と付き合いつつ、真の解決に向かう一歩一歩を大切にしていきたいと思われています。

2002年6月

NGO というと、その名の通り非政府組織。政府の手が十分に届かないセクターへの柔軟な対応ができ、市民が考え中心となって動く組織として、日本でも阪神・淡路大震災以降、急激に NGO の数は増えているようです。エチオピアも 1985 年の大旱魃時の緊急援助以来、数多く国際 NGO、そして地元の NGO が政府による公共サービスの行き届かない農村地域の発展のために働いています。その反面、最終的には地元の政府がやるべきことをすべて肩代わりし、政府か民間の団体か見分けのつかない肥大化した NGO も生まれて来ていることも確かです。そこまですると、地元の政府にはお金がない、仕事ができないというレッテルは貼られたままで、地域の事を一番考えるべき人達でなりたつ政府の機能自体を過小評価しがちです。

メタロビもいよいよ地域から撤退すると言うこの時、多くの活動を住民と地域の政府に引き渡していきますから、それこそ彼らの能力を見極めつつ、さらに信頼をもって関係づくりをしていかなければなりません。もちろん、政府の仕事の効率には問題があるものの、政府の許可あつてのプロジェクトであるのがエチオピアですから、終わる時こそ政府が重要になってきます。今月は郡政府との話し合いの機会が多く持たれましたが、その中で、私達が雇っていた地域出身のプログラム調整員達を、来年から群の政府が雇い続け給料も払うと言う事が具体的に議論されました。いい人材が不足する郡政府にとって、私達が共に働いてきたスタッフはとても重宝されるものですし、地元のスタッフが続けてその地域にて活動をフォローすれば、プロジェクトの持続性も高まり私達としてもうれしいところです。現在、確実に進みつつあるエチオピアの構造改革により、一極集中型の連邦政府がこれから群政府の意志決定権を強めた形に変わろうとしているため、群政府も今までになく積極的に動き出しています。

これまでの活動が、地元政府の監督下でそのままフォローされるのかどうかは未知数でもありますが、彼らに「出来ない事」ばかりに注意を集めるのではなく、彼らに「出来る事」を積極的に励まし、共に成長すると言う姿勢がこれからは必要です。「政府は使えない」の一点張りで、最近では NGO と名乗りつつ AGO (Anti-Government Organization) つまり反政府組織と化し

て、なんでも役所や大きな団体のやる事に対しては反対一筋と言うところも出て来ているのが現実です。日本にはその点が顕著なところも多くなってきているように思えます。もちろん昨今に至っては、市民の感情を煽るような不祥事が絶えない役所もあり、日本もエチオピアにおいても改善すべき点は多くあるでしょう。しかし、「市民と政府」という分け方を越えて、両者の出来る事、出来ない事をしっかりと見極め、共に向上すると言う姿勢が、これから更に求められると思います。

外国人である私が地方政府の役所を訪れると、地域の持ち味や市民を巻き込んだ活動の進捗を語る人は稀です。「あなたは<お金のある>NGO から来た人」だからということで、彼らの口から出る事はすべて「問題」の羅列。なんとかしてくれ、という待ちの姿勢になってしまっているのです。私は問い返します。「私は NGO で働いていますが、気持ちとしては出来る事を一緒にやる CGO(Co-Governmental Organization)でありたいのです。あなたのコミュニティーのために私達が何をして上げられるか、という視点はもう終わりです。ここで何が出来るかを一緒に考えるためにここに来たのです。」

トップダウンで強い政府が特徴のエチオピアですから、今回の構造改革もどこまで本物なのかわかりません。その中で、どれだけ人々と地元政府と共に歩むことが出来るか、大きなチャレンジです。